

生活

yurulily

## 小説家に降る雪

---

わたしにしては、早起きをしたので、いつもしめ切っている遮光カーテンを開けた。  
今年初めての、雪が、降っていた。

わたしはいつも、午後に起きる。仕事をしていないからだ。

むかし、ひとつだけ書いた小説がヒットした。

その印税で一年間ほど、ひっそりと、暮らしている。

小説がヒットするというのは、不思議なものだ。

もちろん、自分では「売れるだろう、売れてやる」と思って書くわけだが、実際売れてみると「え、なんで？」

みたいな気持ちにならざるをえなかったりする。自分の心の中を、共感されたり、反発されたりして、

世間が読んでいる。評価している。そしてそれを認められている。

そんなことを思ったら急に、こわくなった。

わたしは小説をかくのが、こわくなった。

だから、それ以来の仕事を全部、断っている。

降りしきる雪を眺めながら、

わたしは、なにを恐れることなく小説家になれていたら、どんなにかよかったろうと、静かに思う。

いつまでここに居るのだろうか。いつまでこうやって生きるのだろうか。

雪はいつまで降り続けるのだろうか。

わたしはいつまでそれを眺めるのだろうか。

全部、わたしの自由なのだ。

もう、この自由を壊されるような

ところをさらけ出すような、そんな愚行にははしらない。

繋がる術をなくしたんだ、だからわたしは、

ずっとずっと、ひとりだ。たぶんこれからも、ずっと。

息を吸って、はいた。まだ生きてるなあ、と思った。

窓は、くもって、それを穏やかに肯定した。

「ガンだった」

人間ドックの検査の結果が出た、と、  
申し訳なさそうに、パパは言った。

わたしはパパと二人暮らしだ。

ママは、わたしが中学生の頃に、好きな人ができたと言って、  
出て行った。

妹は、そんなママを見てひねくれた。今、だいぶ年上の男と同棲している。

残ったわたしは、パパを守らねばならない。

パパを守るのは、わたししかいないのだ。

それなのに。

わたしにはもう、どうすることもできない。

「まだまだ初期だから、まあ、大丈夫。これからいろいろ検査あるみたいだけど。  
心配させるようなことになって、ごめん」

わたしの眼からは、なみだが溢れてしまって、  
これはパパを困らせてしまうと強く思ったが、もう止まらなかった。

パパの前で泣くなんて、

ママが出て行った時以来だ。

あの時、もう絶対に、パパの前で泣かないと決めたのに。

「パパ、パパ・・・」

「大丈夫だよ、だからそんなに泣かないで、」

「いかないですよ、どこにも。わたしとずっと一緒に居るって、  
約束したじゃない！信じられない、こんなこと・・・！」

わたしはあたまをぶんぶん振った。

でも現実はいちも変わらない。余計に、今が押し寄せてきた。

「わたしひとりおいてどこに行くのよ！わたし、パパが居ない世界でなんて、

生きることはいできない！」

パパに、やさしく肩を掴まれた。

そして穏やかにこう言った。

「パパは、これからもずっと一緒さ。でもな、これだけは覚えていてほしい。

お前には、パパだけじゃない、もっともっといろんな人がついているんだ」

わたしは、顔を上げた。

開けていないが、ママから毎年必ず届く誕生日プレゼントや、

最近どう？と、妹からたまに来るメールのこと。

おばあちゃんは、いろんなものを送ってくるし、

おじさんはたまに家に来て、わたしを笑わせてくれる。

何年間も、こころに強く、きつく結んだ、

紐がほどけていくような気がした。

みんな。

わたしは、強がっていた。

そしてそれに、少しだけ酔っていた。

パパにはわたしだけしか居ないと思っていた、けど、

それはわたしをいのように解釈するだけのいいわけだった。

ほんとうは、分かっていた。

「パパ」

わたしはなみだをふいた。

「絶対元気になって。そしたら、そしたらね、」

眼を閉じた。ゆっくり開けた。

「いろんな人に、会いに行こう。わたしたちを愛してくれてる、

いろんな人に。」

パパは微笑んだ。

「うん、そうだね。会いに行こう」

二人にあたたかい光が射した。

同じ方向を向いて、

また生きていこうと、生きていけると、強く思った。

## 子だから

---

だいすきなバンドの、  
だいすきな人が、15歳の女の子を孕ませた、と、  
おもしろ半分で見ている、  
インターネットのニュースで、知った。

ほんとうがどうか分からないけれど、  
わたしは  
ほんとうなんじゃないかと思った。  
あの人ってなんだか、ふわふわしてたし。

なによりびっくりなのは、  
あんなに好きな人のことなのに、  
ひとつも動揺していないこと。  
ただただ、やりかねないな、と思い、  
そしてその行為を思い、  
なまなましい想像をふくらませている。  
どんな感じなんだろうと。

うーん、きょうも疲れた。

夜十時からのドラマを見る。  
今回はまだ大学生なのに、子供ができたという話である。

なんだよ、またそんな話かよ～とか思ったりして、  
最後には号泣パターン。  
ああ、しあわせになって。

しげくんとは、二か月、会ってない。  
彼はたぶん浮気している。  
たぶんというのは、彼が浮気していると言わないだけで、  
もう誰が見ても他の人にいったんだなって分かるくらいのやつだ。  
ただ、彼ほどではないがわたしも薄情なやつなので、  
実は全然つらくはない。もっと言ってしまえば、  
彼女を演じる重荷が下りたような気分だ。  
ピコリン、と、着信音。きょうも、形式上のメールが来た。

と思ったら違った。

「別れよう、俺ら」

突然だね。

「実は、なおの他に好きな人が居るんだ。ずっと言えなくて、ごめん。」

いや・・・そっかあ。

「その子に、子供ができた。俺の子なんだ」

え、ええ！そうなの！？

わたしは携帯から顔を上げて、  
きょうはなんて日なんだと、思った。  
なんの星の廻り合わせで、なんのタイミングで、  
なんでわたしは、こんなにも様々な人たちの子を孕む瞬間に立ち会わなければ、  
ならないのか。

おめでとう。

一応、そう返信した。

生まれてくる子供はとてつもなく神聖だけど、  
その子供のまわりの人間は、意外と複雑で、  
ともするとけっこう邪念を抱いているということに、遅ればせながら今、気付いた。  
子供は生まれてくる場所を選べないっていうけど、  
自分の時は、愛をたくさん与えられるようになって、  
そういう環境にしたいなあ、うすぼんやりだけど、思った。

こころからひとを好きにならなくっちゃね。

そう思った瞬間、なにか重要なことに気付いたような、気がした。  
寒い冬にかがやく雪は、  
そうとも知らずに、降り続けている。

寒い。

そう思った時にはすでに風邪をひいていた。  
真冬の夜、電気カーペットの上で、  
なにもかけないで寝ていて、  
そりゃ寒いわ、と、  
忙しくて疲れ果てそんなことにも気付かなかったわたしを、  
わたしは、すこし哀れんだ。

でもわたしは、きょうが12月24日だということも、  
あまり気にしていない。  
となりにだれもいないことなんて  
もっと気にしていない。

さみしくなんかない。

そう思った瞬間、くしゃみは部屋に響いた。

お風呂はシャワーですませ、  
冬用に新しく買った保湿力の高い化粧水をひたひたとつけてみた。  
テレビでは、特番をやっているが、あまり観る気にならない。  
本も、雑誌すらも、読む気になれない。  
「疲れてんのかな」  
そうってベッドにもぐりこんだ時。

ぴぴぴ。

メールの着信音だ。

「こんな遅くに、誰だ」

だるい体を起こして、スマートフォンを見た。

「メリークリスマス！

君は、どんな風に過ごしているかなあ。

僕たちが会うことがなくなってから、  
君はすごく仕事をがんばっていると聞いたよ。  
君らしいと思った。むかしからそういうところあったから。  
気が強くて、ちょっと近寄りがたかったけど、  
ほんとはすごく人間味があって。  
だから頼られることも多かったよね。

なにが言いたいかというとき、  
実は僕は、君のことが好きだったんだよ。  
なんて、突然言われても困るか。  
卒業して、会えなくなって、ずっと言えなかったこと後悔してた。  
きっと今まで君は、いろんな恋をしたんだろうと思う。  
僕もそれらしいことをしたけれど、うまくいかなかったよ。  
君のことを、やっぱり思い出してしまうから。

でも、クリスマスなら、言えるかなって。

雪が降っているよ。  
君の街でも見えるかな。

返事はしたくなかったらしなくていいよ。  
読んでくれたことで、僕はもう、充分だから。

最後に言わせて。

君はひとりじゃない。

S・Kより」

読んでいて、画面の明かりがぼやけたので、  
わたしはびっくりして眼を閉じた。  
そうしたらなみだが数滴落ちた。

「なに、かっこつけて・・・全然変わってない・・・」

こころに灯りがともったようで、  
忘れかけた気持ちを掴んだ感覚だった。

ほんとは気付いてた、  
でも知らないふりしてた。  
だって、  
わたしには、届かないしあわせだと思っていたから。  
わたしには、もったいない愛だと思っていたから。

ゆっくりと、スマートフォンを耳にあてた。

「ねえ、わたし、自分のこころに正直でいていいのかな。  
こわがらなくて、いいのかな。  
わたしも君が好きだって、言って、いいのかな。」